

# 初期近代英語におけるイエス・キリストの呼称 X に関する社会言語学的考察\*

矢富 弘

## 1. 序論

現代英語においてイエス・キリスト (Jesus Christ) を表す略字として X が使用されることがある。この用法は主に Xmas (Christmas) という表現において20世紀に一時的に流行したものの、当時のスタイルガイドなどでは使用すべきではないとされており、スティグマが付与されたようである。しかしながら、Christ の略字としての X の歴史は長く、古代ローマ時代から使用され、英語においても古英語の頃から用いられている。本研究では、略字 X の歴史とその社会的意味の変遷を辿る。古英語から現代英語に至るまでの通時的視点から観察し、特に初期近代英語における使用実態を解明することを目指す。

## 2. 古代ローマ、古英語期、中英語期

ラテン語の文献においては略字の使用は頻繁かつ定着しており、Cappelli (1899) の略字辞典には14,000もの略字が収録されている。現代でもローマなどの石碑などには略字が多く残されている。略字の目的として、書記の経済性のほか、神聖なものに対して直接の言及は恐れ多いという考えから、神聖なるものを略字を用いて言及する習慣が定着した。これを *Nomina Sacra* 「神聖なる名前」と呼び、古典ギリシア語のキリスト (χριστός) の綴りを省略した X はその代表例であった (Traube 1907; Rogos-Hebda 2023: 209)。X だけでなく、Xp や Xt などの略字も並行して使用された他、X と P を重ね合わせたモノグラム  $\text{XP}$  (カイ・ロー) も用いられた。これはクリストグラムとも呼ばれ、石碑の彫刻や写本の装飾などに用いられた。キリストの略字 X(p) はラテン語の文献で用いられ、英語においても古英語の時代にすでに使用例がある。

(1) On **X**p̄es mæsse uhtan. (*Anglo-Saxon Chronicle ann. 1021, OED*) [太字の強調は全て筆者による]

中世を通して、ヨーロッパにおけるキリスト教の言語は依然としてラテン語であり、英語のみならずヨーロッパの各国においてラテン語の略字は使用され続けた (Bischoff 1990: 152)。一方で、神聖なる名前としての X の使用は薄れ、単純に経済的、実用的側面での略字の使用が徐々に広まった。このようなラテン語の影響もあり、中世を通して略字の使用は継続されたが、14-15世紀になると略字の使用自体が減少していった (Derolez 2003: 72, 154)。Honkaphoja & Liira (2020: 269)が言及するように、紙と印刷技術が普及していく時代に略字を使用するメリットは加速度的に減少していき、16世紀には略字の使用はほとんどなくなっていった (Honkaphoja 2013)。

## 3. 初期近代英語期

初期近代英語期のキリストの略字 X の使用実態については明らかになっていない。今回は Early English Books Online Corpus と John Donne (1572-1631) の手書きの説教文 (マニュスクリプト) を調査し、使用の実態を観察した。Early English Books Online Corpus は EEBO-TCP の Phase 1 のテキスト (250,000のテキスト、計7億5000万語) をコーパス化したものである。John Donne のマニュスクリプトは、合計 10 の写本に 19 種類の説教文が現存している。

(ただし、Donne 自身が書いたとされるマニュスクリプトは現存していない。) まず出版の大規模コーパスである EEBO においては Christ の略字としての X(p/t) はほとんど見つけることができなかった。X で検索した際のヒット数は膨大であり、全ての用例を分析することは現実的ではなかったため、コロケーション機能を利用して X の前後に Jesus などの関連キーワードを入れて検索してみたが、X の略字はほとんど見つけることができなかった。Christ の略字 X としてはっきりと確認できたのは 3 例であり、そのうち 1 例を以下に示す。

(2) ... i saw chap: 18:2 the woman the papacy drunken with the blood of the saints and with the blood of the martyrs of **j**esus **x**:  
and when i saw her, i wondered with great admiration: [Poole (1685) *Annotations upon the Holy Bible*, EEBO Corpus]

網羅的な調査ではないことが前提であり断定はできないが、初期近代期の印刷物では Christ の略字 X は基本的に使用されていないようである。一方で Donne のマニュスクリプトにおいても X は基本的に使用されていないが、Lothian 写本でのみ使用があり、またこの写本においては Christ を一貫して X と表記していることが観察できた。Lothian 写本に収録されている説教文のうち 3 つの説教文を詳細に調べたところ、75 例の X が使用されたうえ、Xian (Christian) や AntiX (Antichrist) などの表現においても Christ が一貫して略字を用いて表現されている。

(3)... & a **X**ian vnderstanding will take y<sup>m</sup> for a sp[e]c[i]all deliu<sup>er</sup>ance from sin & death by y<sup>e</sup> Messias, by **X** Iesus. p<sup>re</sup>sent any of y<sup>e</sup> Propheties concerning **AntiX** of y<sup>e</sup> Reuelation, ... (OESJD: On Ecclesiastic 12.1, Lothian MSS)

そのほか、Lothian 写本では God の略字としての G. や Lord の略字としての L. そして Church の略字としての Xh など多くの略字が用いられている。

#### 4. 19世紀～現代

このように初期近代期の印刷本においては X の使用はほとんど廃用と言えるような状況であったが、19世紀の知識階級の手紙の中で再び観察されている。Coleridge や Byron といった詩人や Lewis Carroll のような作家が Xmas という表現のなかで使用している例が報告されている (Merriam-Webster 1994: 968; Griffiths 2004)。

(4) ... but if you won't come here before Xmas, I very much fear we shall not meet here at all (Lord Byron, letter 9 Sept. 1811)

略字 X の使用が手書きのテキストにおいて生き残っていたのか、それとも19世紀にギリシャ・ラテン語の知識をもった人々が X という表現を「再発見」したのかは判断できないが、歴史を通して使用が途絶えたわけではないことは言えそうである。そして Christ の略字 X は Xmas という表現で20世紀に入ると頻繁に用いられるようになり、ポストカードや商業広告において使用されることが増えていった。例えば、20世紀アメリカを代表する女性向け雑誌である *Ladies' Home Journal* では1922年の広告において "Give Her a L'Aiglon for Xmas" (L'Aiglonは当時のアメリカで流行していたファッションブランド) という表現を用いている。このような商業における使用から、Xmas という略字は Christmas の世俗化と商業化の現れであると批判されることがあり、さらに過激な批判の中には、Christmas というキリスト教の祝祭日から Jesus Christ の概念を排除しようとするものであり、「異教的」であるとまで言及しているものもある (The Montreal Gazette 1977; American Morning 2005)。結果的に、(5)にあるようにスタイルガイドなどで使用を避けるように薦められるようになった。

- (5) Christmas            Also *Christmas Day*. Never abbreviate to *Xmas* or any other form.  
Xmas.                    Do not use; spell out *Christmas*. (*The New York Times Manual of Style and Usage* 1999)

#### 5. 結論

このように、Christ の略字 X は古代ローマ時代から実に2000年以上の歴史があるが、その間に略字 X に対する社会的評価は大きく変わってきた。神聖なるものを表す、尊敬と畏怖のニュアンスから使用されていた古代～中世の時代から、中世末期～初期近代期ではその評価は消え、印刷技術の発達とともにその使用も減少していった。19世紀になると一部の知識階級で教養を示す表現として用いられた一方で、20世紀には商業の文脈で多用されたことから、略字 X は不敬であるという評価が定着した。このように、言語表現の社会的意味は、それぞれの時代の社会的背景と、「誰」がどのような「意図」で使用するかによって大きく異なり、全く逆の意味が付与されることすらあることを示す好例である。今後の課題として、初期近代期はもとより、中世末期や後期近代から現代に至るまで、幅広い時代を視野に入れ、さらに手書きのテキストをさらに深く調査することによって、X の使用実態をより明らかにできるのではないだろうか。特に写本に関しては、それぞれの写本の写字生や来歴などを考慮することで、略字の使用実態をより詳細に解明できると考える。

#### 主要参考文献

American Morning. 2005. "A conversation with Reverend Franklin Graham." 2005/12/16. <<http://edition.cnn.com/TRANSCRIPTS/051216/ltn.02.html>>. Davies, M. 2017 *Early English Books Online Corpus*. Available online at <https://www.english-corpora.org/eebo/>. Bischoff, B. 1990. *Latin Palaeography: Antiquity and the Middle Ages*. Cambridge University Press. Cappelli, A. 1990 [1899]. *Lexicon Abbreviaturarum Dizionario di Abbreviature Latine ed Italiane*. Milano: Hoepli. Derolez, A. 2003. *The Palaeography of Gothic Manuscript Books: From the Twelfth to the Early Sixteenth Century*. Cambridge University Press. Griffiths, E. 2004. "Why get cross about Xmas?" BBC News. 2004/12/22. <[http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk\\_news/magazine/4097755.stm](http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/magazine/4097755.stm)>. Honkapohja, A. 2013. "Manuscript abbreviations in Latin and English: History, typologies and how to tackle them in encoding." *Studies in Variation, Contacts and Change in English Volume 14: Principles and Practices for the Digital Editing and Annotation of Diachronic Data*. Honkapohja, A. & Liira, A. 2020. "Abbreviations and standardisation in the Polychronicon: Latin to English, and manuscript to print." *The Multilingual Origins of Standard English*, 269-316. Merriam-Webster. 1994. *Merriam-Webster's Dictionary of English Usage*. Merriam-Webster, Inc. The Montreal Gazette. 1977. "Xmas is 'X-ing out Christ'." 1977/12/08. <<https://news.google.com/newspapers?id=JYMuAAAIBAJ&sjid=IKEFAAAAIBAJ&pg=912,1874288&dq=xmas+christmas+x&hl=en>>. Oxford English Dictionary. OED Online. Oxford: Oxford University Press. <<https://www.oed.com> (accessed 18 December 2019)>. Rogos-Hebda, J. 2023. "Multilayeredness and multiaspectuality." In M. Condorelli & H. Rutkowska (eds.) *The Cambridge Handbook of Historical Orthography*. Cambridge University Press. Siegal, A. M. & Connolly, W. G. 1999. *The New York Times Manual of Style and Usage*. Three Rivers Press. Traube, L. 1907. *Nomina Sacra: Versuch einer Geschichte der Christlichen Kürzung*. München: Beck.

\* 本研究は JSPS 科研費 JP21K13031 の助成を受けたものである。